

	延長	高低差	平均脈幅	比重	t	
種子川	30	× 17	× 2	× 2.7	= 2.8 × 10 <sup>3</sup>	
中尾谷	西谷	20	× 10	× 2	× 2.7 = 0.8 × 10 <sup>3</sup>	
	東谷	一号坑	30	× 15	× 1.3	× 2.7 = 1.6 × 10 <sup>3</sup>
		二号坑	20	× 13	× 2	× 2.7 = 1.5 × 10 <sup>3</sup>
合計					6.5 × 10 <sup>3</sup>	

従業員は20名余りで、なお募集中であつた。  
 設備は事務所一棟、詰所二棟あるのみで、選鉱場、貯鉱場等逐次建設の計画があつた。  
 昭和23年8月の報告によれば日産3tに及んだとのことである。

即ち推定約6,500tを計算し得る。

然し蛇紋岩に関係ある此種鉱床は下部への発達著しいものであるので、開発の進捗するにつれて鉱量は上記計算値の数倍に増加するであらう。

#### 6. 調査當時の情況

東鉱山は開発漸く緒に就いたばかりで、種子川鉱床は鑛入坑が着脈し、これから採掘に掛るところであり、鉱石運搬の輕索は準備中であつた。中尾谷鉱床は最初に東谷の一号坑、二号坑の鑛入坑を開鑿し、採掘計画を樹てる程度で、鉱石搬出のエンドレス索道もこれから資材を集める処である。

#### 7. 結語及び意見

本鉱山の鉱床は結晶片岩に侵入した蛇紋岩の一部を交代した脈状鉱床で、露頭の規模は現在知られているものでは高知縣白滝鉱山に匹敵のものである。鉱量は目下のところ、多くはないが、品質は比較的良好であり下部への発展が期待出来るので、大に将来性に富む鉱山である。下部への採鉱開発は山勢急である爲容易である。唯鉱石の搬出設備には相当の資材を要するが、之が整う曉には四國でも有数の産地となるであらう。(昭和23年4月調査)

553. 673 : 550. 8 (521. 83)

### 岡山縣皆部滑石鉱床概査報告

坪谷 幸六

Résumé

#### Talc Deposit of Azai Mine, Okayama Prefecture.

by

Kōroku Tsuboya

Azai mine, Okayama Prefecture, comprises 8 veins in phyllite or sandstone, among which 5 are mined.

The ore reserve is estimated at about 14,000 t as refined clay. The content of Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> is 4.65%.

#### 1. 序言

昭和23年4月7日皆部滑石鉱床の概査を行つたので報告する。同調査には富田光孝を伴つた。調査に當つては東邦タルク株式会社皆部鉱業所の職員諸氏より、種々の便宜を享けた。記して深謝の意を表する。

皆部鉱業所の鉱区関係は次の通りである。

岡山縣試掘登録番号4927番

鉱種名 石綿

鉱業権者 東邦タルク株式会社

鉱区面積 165,000坪

#### 2. 位置、交通及び地勢

皆部鉱業所は岡山縣上房郡皆部町三谷に在り、三谷は下皆部の北2km、縣道の東方に位置する。伯備線<sup>ホウボク</sup>方谷駅から乗合自動車で東北へ16km馳れば下皆部に達する。下皆部には鉱業所事務所がある。

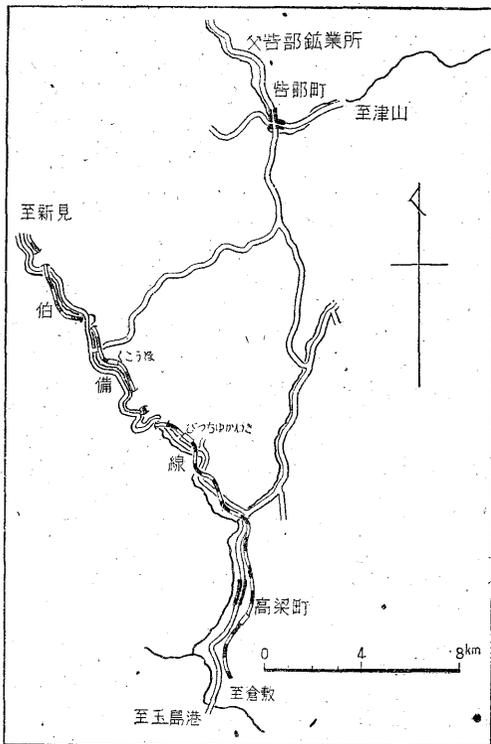
鉱業所附近は地勢緩慢で海拔400m内外の丘陵地で、著るしい谷川もなく多期降雪少い爲採業には甚だ便利であるが、一方には将来必然的に下部へ掘進するとなると堅坑等を考慮せねばならないので、交通、運搬共に比較的恵まれているに拘わらず、鉱山としては土地低夷に過ぎる感がある。

#### 3. 地質

鉱山附近を構成する地質は秩父古生層、第三紀層及び沖積層とであるが、鉱区外稍々離れて蛇紋岩、石英斑岩、閃綠岩が古生層を貫いて発達する。

秩父古生層は砂岩、頁岩、千枚岩及び石灰岩等から成る。砂岩、頁岩は茶褐色で通常走向N40°W、傾斜70°SWであるが局部的に皺曲甚しく、千枚岩に移化する。石灰岩は鉱区の南方に広く発達する。

蛇紋岩は鉱区の東北部に規模稍々大なる侵入岩体をなし、之から分枝した支脈は砂岩、頁岩等に貫入し、水成



第1圖 東邦タルク將部職業所位置交通圖

岩はこの爲に黒色に変じ、石墨千枚岩状を呈する。石英斑岩は鉍区の東に、閃綠岩は北方に分布するが、直接鉍床とは関係がない。

第三紀層は鉍区西部を南流する中川の流域に僅かに分布し沖積層に蔽われる。

#### 4. 鉍床

鉍床は古生層頁岩千枚岩を貫く脈状滑石で多数の露頭がある。便宜上鉍区の北部三谷部落に近い部分を双葉地区、鉍区の南部を本坑地区と仮称する。

双葉地区では部落地並から高さ約50mの丘陵があり、その上部に発見された露頭下部に2本の鑿押坑道を設けて姫路の人松本某が最近迄採掘して居つた。坑道延長150mに達したが、石筆採掘の旧坑に逢着兩盤脆盤弱稼行困難の爲中止したのである。東邦タルク会社は同一脈の下部を鑿押坑道26m、を設けて採掘中である。鉍脈は走向N50°W、傾斜80°SWで、脈幅約1mで、膨縮するが引立では2本に分岐し2mの黒色千枚岩を挟む。脈に接近した兩盤は著しく黒変し石墨様となる。蛇紋岩は全く認められないが、恐らくその小岩脈が完全に滑石に交代されたものであろう。

本坑地区では鉍脈数少くも8條はあり、うち4條を鑿押し坑道を設けて採掘中である。この地区の略中央を通る切畑谷附近に走向N50°Eに走る一断層が考えられ

る。

一坑 断層の北に一坑、上一坑を設けて1脈を鑿押ししている。脈幅2mに及ぶところもある。断層に近い爲脈の方向は定まらないが、その走向略N60°W、傾斜SWである。更に北へ進み断層より遠ざかればやがて脈の方向も定まるであろう。

大口坑 断層の西部の丘陵地に露頭があり、旧時この部で石筆材を採掘し爲に土地が陥没している。大口坑はこの鑿先下部から鑿入を設け17mで脈幅1.3mの脈に中つた。脈は砂質頁岩を母岩とし走向N10°E、傾斜42°SEである。

本坑 大口坑の西南にあり、千枚岩中の一脈に鑿入13.5mで着脈している。脈幅1m、走向N10°E、傾斜40°SEで、着脈後20mを掘進採掘している。鉍脈の兩盤の千枚岩は全く黒変し石墨千枚岩様となる。

鉍生坑。本鉍脈と平行脈で、その上部3mの箇所介在し、鑿押し約29mに及んでいる。これ等本坑及び鉍生坑の脈は露頭近くで露頭掘を行つたこともある。

これ等の外、未探鉍の鉍脈少くも3本はある。双葉坑の西丘陵地の頂には旧時石筆採掘の跡があり、これ等も将来有力な稼行の対象となるであろう。鉍脈を鑿押しする場合、蛇紋岩に脈が交代されたものとすれば、脈の膨縮は極めて変化に富むものであろう。

#### 5. 鑿石及び品位

鉍石のうち双葉坑産のものは黒色の夾雜物多く充分の手選を行わねばならなかつたが、調査後の報告によれば鑿押し進み深部に行くに従つて次第に品質良好となる傾向にあると云う。本坑区域の鉍石は全般に良質で淡綠色を帯び、黝色の縞はあるが、多少手選を施せば国内では優秀の部に属するものである。

本所に於て1級品なるものを分析した結果は次の如くである。

	No. 1	No. 2
SiO <sub>2</sub>	61.29	61.34
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1.30	0.91
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		
FeO	4.65	0.49
CaO	0.02	0.00
MgO	29.20	32.59
MnO	tr	—
Na <sub>2</sub> O	n. d.	—
K <sub>2</sub> O	n. d.	—
TiO <sub>2</sub>	tr	—
H <sub>2</sub> O	0.07	—
Ig. Lass	—	4.88

No. 1 分析者 安藤 ?

No. 2 比較の爲満洲大石橋産のものを掲げた。但し熱源不充分的爲灼減の測定ができなかつた。

## 6. 鑛 量

双葉地区では丘陵地を貫く鉾脈で上部も下部も採掘困難と認め、且つ探鉾坑道即採掘坑道なので、推定鉾量の算定しか望めない。双葉坑では上部へ10m、延長50mと見做し、本坑地区では、上部への平均30m、延長を100mとして算定し、本坑地区の一坑は脈一定せぬので、その算定は差控へた。

各鉾脈の推定鉾量は次の如くである。

	延長 (m)	高低 (m)	脈幅 (m)	鉾石の 比重	鉾量 (t)
双葉脈	50	10	1.0	2.7	$1.4 \times 10^3$
大口脈	70	30	1.3	2.7	$7.4 \times 10^3$
本 脈	100	30	0.7	2.7	$5.7 \times 10^3$
鉾生脈	100	20	1.0	2.7	$8.1 \times 10^3$
合計					$2.3 \times 10^3$

となり採掘及び選鉾の実收率を60%とすれば、精鉾埋藏量約1万4千tと見込まれる。

上記の算定は当時の状況から行つたので、更に下部の開発が進み、又他の露頭で採行可能のものが発見されれば当然鉾量は増加するものである。

## 7. 沿革及び調査當時の情況

皆部鉾床は旧時石筆材を採掘した処より昭和22年9

月新に探鉾調査が行われ、東洋タルク株式会社の創立を見、同年11月より出鉾するに至つた。月別産額は次の通り。

11月	12月	1月	2月	3月20迄
150t	180t	150t	75t	105t

労務者は半農で登録者50名、内出勤者36名(内選鉾婦10名)であつた。

鉾石は採掘場から縣道迄約500mは吠詰にして人が負ひ、これから方谷駅まで16kmを貨物自動車にて搬出、駅渡しで大阪方面へ賣鉾していた。又一部の鉾石は新見の製粉工場を借りて粉碎し賣鉾していた。

## 8. 結語及び意見

皆部の鉾床は鉾量滑石としては豊富とはいへないが、当分採行には充分であり、鉾石の品位も優れているので、關西方面の需要の幾割かは供給し得ると思考する。今後は更に探鉾を進め露頭発見に努めるべきであろう。此処で尤も支障となるは運搬で、特に現場から縣道迄の搬出は短距離に拘わらず多額の費用を要するので、早急に貨物自動車を乗入れの道路建設、積込場の建設、出来得べくんば自家用製粉工場建設迄行つた方が望ましい情況であつた。(昭和23年4月調査)

553. 94 : 550. 8 (523. 1)

## 徳 島 縣 勝 浦 炭 田 概 査 報 告

菊 池 徹\*

Résumé.

### Geology of the Katsuura Coal Field with Description of its Five Collieries, Tokushima Prefecture.

by

Tōru Kikuchi

The author surveyed the Katsuura coal-field on June 1948. The coal-field spreads over along the middle stream of the river Katsuura which runs eastwards in the central portion of Katsuura County.

The coal-bearing beds belong to Lower Cretaceous, containing three coal seams which have unstable thickness (0.3 ~ 1.0 m). Coal in this district is mostly slack (dusty coal), containing comparatively much ash (30 ~ 60%), and the calorific value varies from

\* 鉾床部

2,000 cal to 5,000 cal. The possible reserves are about 1,500,000 tons in this district.

There are the five collieries in the field, namely Tokushima, Tatsugaya, Katsuura, Takahoko and Fukuhara Colliery. They are all very small enterprize and even the largest colliery has an monthly output of less than 1,000 tons.

## 1. 緒 言

昭和23年7月、徳島縣勝浦炭田を概査したのでその概要を報告する。

本炭田内に分布する炭硯は、東より次の如くである。

徳島炭山 (石原産業 K. K. ・試登2177号)

辰ヶ谷炭硯 (矢間房太郎 ・探登60号)

勝浦炭硯 (四國炭業 K. K. ・試登1906号、他)

高銻炭硯 (宮本梅二郎 ・試登2242号)

福原炭硯 (橋井四郎 ・試登2411号)

## 2. 位置・交通及び地形

勝浦炭田は、徳島縣勝浦郡の中央を北東方向に流れる